「グローバル・パートナーシップ」を育成する多文化間イシュー教材の日米協働開発

～「幕末の日米交流物語－万次郎とマクドナルドー」～

小原　友行*

The Development of Multi-cultural Instructional Materials to Advance Japan-US Global Partnership through Collaborative Action Research: Using the Mid-19th Century International Exchange Stories of John Manjiro and Ranald MacDonald

Tomoyuki KOBARA*

ABSTRACT

This research aims to develop teaching materials that reflect multi-cultural issues. These are considered to be effective in fostering "global partnerships," one of the qualities and abilities required in the rapidly evolving global era. The method, known as "collaborative action research," was carried out between Japan and the USA. Specifically, this paper is an attempt to develop lesson plans on the history of the US-Japan exchange story of John Manjiro, who first informed the Japanese of the existence of the United States, and Ranald McDonald, the first English teacher in Japan, in the mid-19th century.

キーワード：「グローバル・パートナーシップ」、多文化間理解学習、教材開発、ＮＩＥ（教育に新聞を）

１．　はじめに～本研究の目的と方法～

本研究の目的は、急速に進展するグローバル時代だからこそ求められる資質・能力の一つと考えられる「グローバル・パートナーシップ」を育成するために有効と考えられる「多文化間イシュー教材」を、日米間での「協働的アクションリサーチ」[1)]という手法を通して開発することである。

開発にあたっては、下記のような方法・手順で研究を行っていった。

① 「グローバル・パートナーシップ」を育成するアクティブ・ラーニング型の多文化間理解学習に関する理論仮説を、日米協働のチームで構築する。

② 構築した理論仮説に基づいて、多文化間理解学習のための教材として有効と考えられる「多文化間イシュー教材」の日本語版・英語版を、日米協働のチームで開発する。

③ 開発した「多文化間イシュー教材」を用いて、日米両国の小・中学校において筆者自身が研究授業を試行する。

④ 試行した研究授業の結果の分析・評価を、日米協働チームで行う。

⑤ 研究授業の分析・評価に基づいて、開発した教材および授業計画の修正・改善を図るとともに、多文化間理解学習の理論仮説の有効性を吟味する。

---

*大学教育センター兼任教員・人間文化学部教授

なお、本研究における米国側の協働研究者は、下記の５名である
① サンドラ・ウォーレン（イーストカロライナ大学教育学部教授）
② ジョン・タッカー（イーストカロライナ大学歴史学科教授、アジア研究プログラム代表）
③ ジュリアン・カーター（ノースカロライナ州グリーンビル市の C.M.Eppes 中学校社会科教諭）
④ トーマス・クーパー（ノースカロライナ州ローリー市の Reedy Creek 中学校副校長）
⑤ コーリーン・バート（ノースカロライナ州グリーンビル市の Elmhurst 小学校校長）

２．多文化間理解学習のための教材開発に関する３つの視点（仮説）

（１）目標としての「グローバル・パートナーシップ」

本研究における「グローバル・パートナーシップ」とは、平和な国際社会を実現しようとする意欲や意識をベースに、その実現に向かって次の７つの「C」を行うことができる資質・能力と規定しておきたい。

① キュリオシティー（好奇心）
② コミュニケーション（対話）
③ コラボレーション（協働）
④ クリティカルシンキング（批判的思考）
⑤ クリエーション（創造）
⑥ チャレンジ（挑戦）
⑦ チョイス（選択）

これらの資質・能力は、急速に社会のグローバル化が進展していく中で、文化間での格差が広がり、摩擦や対立が深刻になっている今という時代において、憎しみや悲しみの連鎖を断ち切り、それを乗り越える勇気や寛容性を持つためにも必要不可欠なものである。また、「一方が正義で他方が悪」「どちらかが勝者でどちらかが敗者」とするのではなく、多様な正義を認めどちらもが勝者となれるような世界の実現が求められている今日、10～20 年後という近未来の学校教育を考えると、このような資質・能力を備えた児童・生徒の育成は、最重要な今日的課題の一つであると考えることができる。

また、これら７つの「C」は、「ＯＥＣＤ教育２０３０」[2)]で以下の３つに分類されている「私たちの社会を変革し、私たちの未来を作り上げていくためのコンピテンシー」を支えるものと、とらえることもできよう。

① 新たな価値を創造する力（Creating new value）
② 対立やジレンマを克服する力（Reconciling tensions and dilemmas）
③ 責任ある行動をとる力（Taking responsibility）

（２）「多文化間イシュー教材」としての３種類の「ストーリー」（物語）

次に、「グローバル・パートナーシップ」の育成を目指す多文化間理解学習に有効と考えられる教材としては、次の３つの「多文化間イシュー教材」を考えることができよう[3)]。

① 「相互交流型教材」…文化間での相互交流の活動を通してウイン・ウインの関係を構築する（した）人間の問題解決の「ストーリー」（例えば、「日米の懸け橋となったジョン万次郎やマクドナルド」「サダコとオバマ大統領の折り鶴」など）
② 「希望創造型教材」…新たな価値の発見や再構築によって未来への希望を生み出そうとしている（した）人間の問題解決の「ストーリー」（例えば、「人類共通の課題である平和・多文化共生」「地域の新たな魅力・価値を創造する里山・里海の再生」「未来創造に向かう共助型防災・減災・応災プロジェクト」など）
③ 「対立・葛藤型教材」…文化間での対立やジレンマを克服しようとする（した）人間の問題解決の「ストーリー」（例えば、「論争問題：移民や難民の受け入れ」「戦争と平和の課題～パールハーバーとヒロシマ～」など）

本小論は、①の「相互交流型教材」を取り上げて授業開発を試みた成果の報告である。具体的には、「アメリカ」を最初に伝えたジョン万次郎と、最初の英語教師となったラナルド・マクドナルドの日米交流の歴史物語を教材として取り上げ、日米の中学校７年生で研究授業を実施し、その結果を日米の研究者で批判的に分析・吟味することを通して修正・改善を図った授業プランである。

研究授業の実施は、日本では広島県三原市にある広島大学附属三原中学校７年生の２クラス（2018 年 5 月 28 日実施）で、米国ではノースカロライナ州グリーンビル市の C.M. Eppes Middle School の７年生の１クラス（2018 年 9 月 24 日実施）で行った。7 年生で行ったのは、ジョン万次郎が米国の小学校に入学したのが 14 歳であり、同年代の生徒を意識したためである。なお、授業者はいずれも筆者で、附属三原中学校の柳生大輔教諭のクラスと、C.M. Eppes Middle School のジュリアン・カーター教諭のクラスで各１時間を借りて行った[4)]。

（３）ＮＩＥ（教育に新聞を）を取り入れた「アクティブ・ラーニング」

授業の主要な学習活動としては、学習者が「新聞記者（ジャーナリスト）」として時空を超えて、およそ 170 年前の 19 世紀半ばの日本・米国にタイムマシンで移動して、彼らを取材し、それを新聞記事として発信するという設定で、ＮＩＥ学習の基本である以下の３つの活動を取り入れた。

① メディアから必要な情報を取り出す。（情報の受信）
② 情報の背景を分析・解釈する。（情報の読解）
③ メッセージとしての情報をクリエイティブに生み出す。（情報の発信）

具体的には、①の「情報の受信」では、物語として開発された新聞資料（「万次郎新聞」「マクドナルド新聞」）やスライドから、歴史新聞記者による取材の視点から交流物語の情報を取り出す活動を行う。②の「情報の読解」では、二人の物語に共通する「キーワード」（例えば、「捕鯨船」「英語」「日米交流」「冒険心」など）の発見とその地理的・歴史的背景の熟考（「なぜ、どうして」という問いに基づいて、人物（個人・集団・組織体）の行為の背後にある意図・目的・動機やその意味・意義を視点としたストーリーの解釈を行う。そして③の「情報の発信」では、分析・解釈したメッセージを伝える、見出し、イラスト、意見や記事内容を考え、それを「はがき新聞」に表現する活動を行う。

３．単元の授業プラン（日本版）～「幕末の日米交流物語－万次郎とマクドナルド―」～

（１）単元の目標

【知識・技能】
・資料やスライドからジョン万次郎とラナルド・マクドナルドの物語に関する知識を抽出することができる。
・抽出した知識をまとめ、発表することができる。

【思考力・判断力・表現力】
・処罰されるかも知れない鎖国下の日本に、万次郎はなぜ帰国しようと考えたのか、鎖国下の日本ではなぜ万次郎を受け入れたのか、その目的や理由を考え、表現することができる。
・ラナルド・マクドナルドは、どうして日本に入国しようと考えたのか、鎖国下であるにもかかわらず、幕府はなぜ彼から英語を学ばせようとしたのか、その目的や理由を考え、表現することができる。
・万次郎とマクドナルドの物語に共通するキーワード（「捕鯨船」「英語」「日米交流」「冒険心」など）の歴史的背景を考えることができる。

【学びに向かう力・人間性】
・「はがき新聞」作成を通して、幕末の日米交流の物語への興味・関心や学習意欲を持ち続けることができる。
・万次郎やマクドナルドに備わっていた「グローバル・パートナーシップ」という人間性や、今日まで続く文化間交流に興味・関心をもつことができる。

（２）単元の展開計画の概要（全３時間、実際の研究授業はその骨子を中心に１単位時間で実施）

展開過程	テーマ	主要な問いと活動
導　入	教材との出会い	○「グローバル・パートナーシップ」に必要なものは何だろう、ジョン万次郎とラナルド・マクドナルドの日米交流の物語を通して考えてみよう。 ○みなさんは歴史新聞記者です。およそ 170 年前の幕末の日本・米国にタイムマシンで移動して、二人に取材をするとしたら、どんなことを聞いてみたいですか。 ○今日は、二人に取材して考えたことを「はがき新聞」に表現してもらいます。
展開１	ジョン万次郎の物語	○資料とスライドから、「アメリカ」を初めて伝えた日本人であるジョン万次郎の日米交流の物語を知る。 ◎処罰されるかも知れない鎖国下の日本に、万次郎はなぜ帰国しようと考えたのか、個人で考えてみよう。 ◎鎖国下の日本では、なぜ万次郎を受け入れたのか、ペアで意見交換をしてみよう。 ○現在まで万次郎の子孫と、捕鯨船のホイットフィールド船長の子孫が交流を続けている事実を知る。 ○歴史新聞記者として当時の万次郎に取材するとしたら、どんなことを聞いてみたいか、それはなぜか、メモをしておこう。
展開２	ラナルド・マクドナルドの物語	○資料とスライドから、日本における「最初の英語教師」となったラナルド・マクドナルドの日米交流の物語を知る。 ◎ラナルド・マクドナルドは、どうして日本に入国しようと考えたのか、個人で考える。 ◎鎖国下であるにもかかわらず、幕府はなぜ彼から英語を学ばせようとしたのか、ペアで意見交換してみよう。 ○「マクドナルド友の会」が日米で結成され、現在も交流がなされている事実を知る。 ○歴史新聞記者として当時のマクドナルドに取材するとしたら、どんなことを聞いてみたいか、それはなぜか、メモをしておこう。
展開３	二人に共通する「キーワード」	○二人の物語に共通するキーワードを何だろうか。できるだけ多く挙げてみよう。 ・「捕鯨船」 ・「英語」 ・「日米交流」 ・「冒険心」など ○共通するキーワードが生まれる歴史的背景と要因を、話し合ってみよう。
終　結	幕末の日米交流物語に関する「はがき新聞」の作成と交流	○歴史新聞記者として、ジョン万次郎やラナルド・マクドナルドに代表される幕末の日米交流物語を取り上げた「はがき新聞」を個人で作成しよう。 ・題字、見出し、イラスト、記事、意見・考えなどを書き込もう。 ○作成した「はがき新聞」を発表し、クラスで交流しよう。

４. 単元の授業プラン（米国版）: **“The International Exchange Story of John Manjiro and Ranald MacDonald in the Mid-19th Century between Japan and USA”**

Lesson Title:　Let’s become a history journalist!
Date: September 24th, 2018 (08:20AM-09:20AM)

Grade: 7th grade, Teaching History Class, C.M.Eppes Middle School
Subject: Social Studies (History)

Description: In this lesson, students will learn about the international exchange stories of John Manjiro and Ranald MacDonald in the Mid-19th century between Japan and USA. Then, they will think about the historical background of the story and discover the keywords common to the stories of the two historical persons. In the end, they will make "the postcard newspaper" by themselves.

Objectives: As the result of the activity, students will be able to

1. know about the historical story of John Manjiro and Ranald MacDonald from a document and a slide.
2. think and recognize the following;
   1) why Manjiro wanted to go back to Japan under the national seclusion policy, and why Manjiro might be punished.
   2) why MacDonald wanted to go land Japan, and why he became the first English teacher in the period of national seclusion.
   3) discover the common keywords in the stories of Manjiro and McDonald, such as the "whale fishing", "English teacher", "Japan-U.S. international exchange" and "adventurous spirit".
   4) think about the historical background of the keywords.
3. have interest in and will learn about "the global partnership" in the international exchange between Japan and USA.

Procedure:

Theme	Activities	Materials
Encounter with the Instructional Materials	1) The teacher will introduce the stories of the Japan-U.S. international exchange of Mr. John Manjiro and Mr. Ranald MacDonald in the Mid-19th century. 2) Students will be a history newspaper reporter. They must move back to the period of 170 years ago in Japan by the time machine. 3) Students will collect the news from them, and make "a postcard newspaper" on the two historical persons.	World Map PowerPoint (Pictures of the Manjiro and MacDonald)
The story of Mr. John Manjiro	1) The teacher will talk about the story of Manjiro, a first Japanese who reported about "the United States" . 2) Students will think about why Manjiro intended to go back to Japan under the national seclusion policy. 3) Students will talk about why the Shogunate (Japanese government) accepted Manjiro under the national seclusion.	PowerPoint Manjiro's Newspaper
The story of Mr. Ranald MacDonald	1) The teacher will talk about the story of MacDonald, who became "the first English teacher" in Japan. 2) Students will think about why MacDonald intended to go and land in Japan .	PowerPoint MacDonald's Newspaper

	3) Students will talk about why the Shogunate gave permission of learning English from him under the national seclusion.	
The common keyword on the life of two historical person	1) Students will discover the common keywords in the stories of the two persons. For example; ・“Whale Fishing” ・“English Teacher” ・“Japan-U.S. International Exchange” ・“Adventurous Spirit” 2) Student will think about the historical background of the common keywords.	
Making the “postcard newspaper” on the Japan-U.S. international exchange story	1) Students will make “the postcard newspaper” which covers the story of Japan-U.S. international exchange. 2) Students will write the title, heading, illustration, article and opinion. 3) Students will exchange “the postcard newspaper” in a class with one another.	Worksheet (“the postcard Newspaper”)

５． おわりに～本研究の成果と課題～

本研究の成果としては、次の４点を指摘することができる。第１は、日米の 13～14 歳の生徒に対して、共通する内容の研究授業を実施し、「多文化間イシュー教材」による授業の可能性に対する手ごたえを得ることができたことである。第２は、ストーリー（物語）の歴史新聞による紹介 [5]、歴史新聞記者としての個人・グループでの背景の読解（分析・解釈）、個人での「はがき新聞」の作成 [6]という３段階の学習過程と学習活動は、日米に共通して有効であったことである。第３は、「はがき新聞」づくりという学習活動は、日米の中学生にとっては初めての経験であったが、15～20 分程度の時間で作成できるということもあり、興味・関心をもって取り組んでくれたことである。そして第４は、作成された「はがき新聞」の内容分析から解釈すれば、見出し・イラストの表現や意見・考えの内容を見る範囲内ではあるが、ジョン万次郎とラナルド・マクドナルドの日米交流物語のストーリーに込めた「グローバル・パートナーシップ」の重要性に関するメッセージは、生徒にも十分に受けとめられたと判断できたことである。

本研究の課題としては、次の２点を指摘することができる。第１は、日米ともに１単位時間という限られた時間の中での研究授業の実施であったため、生徒間の対話を通して深める段階にまでは至らなかったことである。そのこともあり、研究授業後の授業プランの改善案としては、全３時間の計画に修正した。第２の課題は、19 世紀半ばの世界の歴史的状況に関する認識の少ない日米の 13～14 歳の生徒にとっては、やや難解な授業となったことである。なお、イーストカロライナ大学の歴史クラスと福山大学の人文地理のクラスにおいても、同じ教材を用いて 90 分の研究授業を実施したが、歴史的背景の理解が深いこともあり、効果的な授業となった [7]。

【註】

1) 本研究においては、日米間での「協働的アクションリサーチ」を、文化や考え方の異なる日米の教師・研究者が、これからの時代に求められる共通の教育目標を実現するための、あるいは児童・生徒の実態の中に顕在化してきている教育課題を克服するための授業仮説を設定し、それに基づいて研究授業を試行し、結果の批判的・反省的な吟味を通して仮説の修正・改善を協働的に行っていこうとする教育実践研究ととらえている。

2)「ＯＥＣＤ教育２０３０」については、次のページを参照。
・OECD, 'THE FUTURE OF EDUCATION AND SKILLS EDUCATION 2030',
(http://www.oecd.org/education/2030/E2030%20Position%20Paper%20(05.04.2018).pdf, 閲覧日：2020/01/27)
・文部科学省初等中等教育局教育課程課「OECD Education 2030 プロジェクトについて」
(https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf#search=%27OECD%E6%95%99%E8%82%B2%EF%BC%92%EF%BC%90%EF%BC%93%EF%BC%90%27, 閲覧日：2020/01/27)

3) 「多文化間イシュー教材」の開発については、次のような計画で研究を進めている。
・「相互交流型教材」…2018 年度に開発を行い、日本教材学会第 10 回研究発表大会（2018 年 10 月 21 日、福山大学）で、「グローバル・パートナーシップ」を育成する多文化間交流教材の日米協働開発～ジョン万次郎とラナルド・マクドナルドの日米交流物語～」として発表。
・「希望創造型教材」…2019 年度に開発を行い、全国社会科教育学会第 68 回全国研究大会（2019 年 11 月 10 日、島根大学）で、「平和を願った二人の少女の物語～禎子とヒロ子～」として発表。
・「対立・葛藤型教材」…2020 年度に、「ヒロシマの校庭から届いた絵～本川小学校の物語～」として開発予定。

4）実際の研究授業では、広島大学附属三原中学校の場合は１単位時間（50 分授業）で導入・展開と終結の課題提示までを行い、「はがき新聞づくり」は家庭での課題とした。C.M. Eppes Middle School の場合は、8:20～9:20 の 60 分の授業時間をもらったので、導入・展開を前半の 40 分、終結の「はがき新聞づくり」を後半の 20 分で実施した。

5) 授業の中心的資料として用意した歴史新聞は下記の通りである。また、その縮小版（実際は A4 版両面印刷を各生徒に配布）を別紙に載せた。
【日本の生徒用】
・「万次郎新聞」…別紙１
・「マクドナルド新聞」…別紙２
【米国の生徒用】
・ "The Manjiro Times"…別紙３
・ "The MacDonald Post"…別紙４

6) 日米の生徒が実際に作成した「はがき新聞」の実例を別紙に紹介した。
・はがき新聞例（広島大学附属三原中学校７年生作成）…別紙５
・はがき新聞例（C.M. Eppes Middle School 7 年生作成）…別紙６

7) 参考として、同じ教材を用いて大学生に行った 90 分授業は、下記の通りである。
・イーストカロライナ大学歴史クラスで 2018 年 9 月 25 日に実施（米国ノースカロライナ州グリーンビル市、ジョン・タッカー歴史学科教授担当）
・福山大学共通教育「人文地理（２）」クラスで 2018 年 11 月 21 日に実施（筆者担当）

【本教材開発のための参考文献】

1）中浜博『私のジョン万次郎　子孫が明かす漂流の真実』小学館、1994。
2）井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』偕成社、1999。
3）中濱博『中濱万次郎』冨山房インターナショナル、2005。

4）中濱京『ジョン万次郎　日米両国の友好の原点』冨山房インターナショナル、2008。
5）永国淳哉編『ジョン万次郎　幕末日本を通訳した男』新人物往来社、2010。
6）マーギー・プロイス、金原瑞人訳『海を渡ったサムライ魂』集英社、2012。
7）岡崎ひでたか『万次郎　地球を初めてめぐった日本人』新日本出版社、2015。
8）ジョン万次郎述、河田小龍記、谷村鯛夢訳『漂巽紀畧』講談社、2018。
9）ウイリアム・ルイス、村上直次郎編、富田虎男訳『マクドナルド「日本回想記」』刀水書房、1979。
10）吉村昭『海の祭礼』文春文庫、1986。
11）江越弘人『幕末の外交官　森山栄之助』弦書房、2008。
12）今西佑子『ラナルド・マクドナルド　鎖国下の日本に密入国し、日本で最初の英語教師となったアメリカ人の物語』文芸社、2013。
13）Roe, Joann , *Ranald Macdonald: Pacific Rim Adventurer*, Washington State University Press, 1997.
14）Schodt, Frederick L., *Native American in the Land of the Shogun: Ramallah MacDonald and the Opening of Japan*, Berkeley, California, Stone Bridge Press, 2003.

【追記】

本研究は，下記の科研費の助成を受けて行った研究成果の一部である。

１．研究種目名：基盤研究(C)（一般）
２．課題番号：１８Ｋ０２６８８
３．研究題目：「グローバル・パートナーシップ」を育成する多文化間イシュー教材の日米協働開発
４．補助事業期間：平成 30 年度～令和２年度

別紙１　「万次郎新聞」

（表面）

主な記事
・万次郎の生涯
・万次郎の業績
・社説「万次郎が見た世界」

万次郎新聞

2018年(平成30年)
9月24日月曜日

日本に初めて「アメリカ」を伝えたジョン万次郎

万次郎 救出した捕鯨船の船長の交流は、子孫によって今も続く

万次郎は、日本人として初めて近代捕鯨を学び、経験し、蒸気機関車に乗り、蒸気船に乗った。ゴールドラッシュの西海岸で金鉱掘し、ジーンズを買った。日本人として初めてフリッパ鯨を、そして、たくさんのメリカ文化を初めて日本に伝えた。

船員されるかも知れない捕鯨中の日本に、万次郎はなぜ捕鯨にしようと考えたのか。鎖国下の日本では、なぜ万次郎を受け入れたのか。

【万次郎の功績】
・ちょうど十年前のアメリカ留学先だった、十六歳、ジョン万次郎は、ハーレット・フェアヘブンのオックスフォードスクール（小学校）に通いはじめました。これが、日本初のアメリカ学生誕生の瞬間です。さらに十七歳になると、ハーレット・アカミー（専門学校）に進学。ここで、航海術、捕鯨術を学びました。
・ゴールドラッシュで「帰国」資金を稼いだ

ジョン万次郎（中浜万次郎）（1827～1898）

ジョン万次郎がたどった海の道

ジョン万次郎は、一八四八年頃にはたどりつけなかったゴールドラッシュ

で金を採った唯一の日本人とされています。ここでも〇日間働き、八〇〇ドルに相当する金を獲得しました。捕鯨船に乗って三年間で、約三五〇ドルでしたから、その収入は変えるのでした。

・「預言者」「英語のすすめ」

一八六〇年、ジョン万次郎は、日本人として初めて太平洋を横断しました。

・「万次郎の功績」

・ビジネスのシステムを伝えた

ジョン万次郎がビジネスのシステムを知ったのは、当時のアメリカで鉄道敷設事業や捕鯨事業などへの投機ブームがあったからです。

ジョン万次郎は、アメリカの生活の中で、大統領が選挙で選ばれることを知り、自由、平等、民主主義を体感しました。そして、その思想を幕末の日本に伝えました。

そうした思想は、坂本龍馬の初期新聞（船中八策）、明治維新後に高知を中心に興った自由民権運動などに影響を与えたかもしれません。

・民主主義の思想を伝えた

ジョン万次郎は、アメリカ人の生活の中で、大統領が選挙で選ばれることを知り、自由、平等、民主主義を体感しました。そして、その思想を幕末の日本に伝えました。

そうした思想は、坂本龍馬の初期新聞（船中八策）、明治維新後に高知を中心に興った自由民権運動などに影響を与えたかもしれません。

（裏面）

創刊号　万次郎新聞　2018（平成30）年9月24日

社説
万次郎が見た世界
十九世紀半ばの国で、万次郎は世界の何を見たのだろうか。そして、何を日本に持ち帰ったのであろうか。産業革命による社会変化、民主主義の芽吹き、という考えが、同時に「鎖国」という在来の国策を見直すのではなかろうか。数年間帰ったあと、幕末、開国、明治維新という時代の変革を導く論調の一つとなったと考えられる。
なぜ日本は、鎖国しようと考えたのであろうか。また、鎖国の日本では、なぜ変革が入れたのであろうか。
知りたい疑問が出てきたら、「万次郎の生涯を読み解くことは、国際交流と国際貢献を学ぶことにつながるであろう。

万次郎の生涯（年表）
・一八二七（文政10年）　土佐藩（高知県）の中浜家の貧しい漁師の次男として誕生。
・一八四一（天保12年）　万次郎、（14歳）、仲間と出漁中、遭難。
・一八四二（天保13年）　鳥島で（15歳）、アメリカ捕鯨船に救助される。ハワイで仲間と別れ、万次郎のアメリカ本土における生活。
・一八四三（天保14年）　ホイットフィールド船長の故郷フェアヘブンへ、学校へ英語、数学、測量、航海術、造船技術を学ぶ。
・一八四八（嘉永1年）　捕鯨船フランクリン号の一員として、ハワイ、日本近海、ベーリング海、北太平洋、ベーリング海、ハワイ、ホノルル、ハワイ、ホノルル、ハワイ、ホノルル

別紙 3 “The Manjiro Times”

（表面）

Main article
- Life of Manjiro
- Works of Manjiro
- The editorial: "world that Manjiro looked at"

The Manjiro Times

MANDAY
September 24, 2018
Editor
Tomoyuki Kobara
(Fukuyama University)

Manjiro, The first Japanese who introducee "the United States"

The relationship between the descendant of captain of the whaler and Manjiro still continues.

Manjiro was the first Japanese to learn the modern whaling and to rideon a steamship and a steam locomotive. He was the first Japanese to wear a tie, jeans and boots and to introduce American culture to Japan. He earned some money in the gold rush of the west coast to return to his country.
Why did Manjiro try to return to Japan in its isolation period, despite the death penalty? Why did the Shogunate (Japanese government) allow him to get into Japan?

John(Nakahama) Manjiro (1827-1898)

Way of the sea which Manjiro traced

Interchange of both families of Manjiro and Captain Whitfield
"The John Manjiro Whitfield Memory International Grassroots Exchange Center" started in 1990. Also, "the Whitfield. Manjiro Friendship Memorial in Fairhaven" is opened in 2009.

Works of Manjiro

-He was the first Japanese student in America 175 years ago.
Manjiro entered the Oxford school (elementary school) in Fairhaven at 16 years old. He was the first Japanes student to study abroad. He attended Bartlet Academy where he studied in navigation, mathematics and ocean surveying at 17 years old.

-He earned money to return to Japan in gold rush.
Manjiro was the first Japanese to work in California in 1848. He worked there for 70 days and earned 600 dollars which, in those days, was quite good. Because whaler's income was 350 dollars for three years..

-He introduced business system in America.
Manjiro learned American business system by railroad and whaling industry. His informations made a great contribution to Japanese modernization.

-He introduced the spirit of the democracy.
Manjiro learned that President was elected by U.S. citizens every four years in American life. It made him expeience freedom, equality and democracy. And he introduced them to Japanese in the national isolation period.

（裏面）

Manjiro Times MANDAY, 24th September, 20

Editorial

The world that Manjiro experienced
In the United States of the mid-19th century, what kind of world did Manjiro see? And what did he take to Japan?
He would see the social change, the democratic society and the view of gender equality that the industrial revolution brought and also social problem such as the racial discrimination. It seems that the way of thinking that he learned in America made a great contribution to Japanese modernization.
Why did he try to return to Japan? Why did Japanese government accept him? Many questions occur to us through his story.
Understanding his life help us to learn an internatinal exchange and contribution.

Books about John Manjiro

Manjiro's footprints

Manjiro spirit
Nakanohama where Manjiro was born
Manjiro birthplace
House of the captain who lodged
The elementary school
Torishima which I drifted
English conversation book
Manjiro at the time of the return
The inside of the house of the captain
Manjiro museum
Grave of Manjiro
Landing monument of Okinawa

Chronological table
1827 (0 years old)
- He was born as the second son of the poor fisherman of Nakanohama of the Tosa.

1836 (9 years old)
- He was given to the subordinate worker on behalf of the father death, a sickly older brother.

1841 (14 years old)
- He went out of the Gulf of Usa for fishing and drift. He was saved on a whaler after the uninhabited island life of 1143 days in Torishima.
- He part from a friend in Hawaii, and only Manjiro decides a thing over the mainland U.S.

1843 (16 years old)
- To hometown Fairhaven of Captain Whitfield.He learn English, mathematics, surveying, the navigation, at technology school.

1848 (21 years old)
- He become a first officer of whaler Franklin.

1849 (22 years old)
- He went to California of the gold rush.

1850 (23 years old)
- He obtained work 600 dollars in gold ore. He went to Hawaii.He fix the return home preparations and leave Hawaii.

1851 (24 years old)
- He landed Ryukyu (Okinawa) and Satsuma. He was investigated by Nariakira Shimazu.

1852 (25 years old)
- He came back Kochi.

1853 (26 years old)
- He became a samurai in the Tosa feudal clan.
- He became immediate follower of the Shogun for an interpreter and give a family name of "Nakahama".

1860 (33 years old)
- He went on warship "Kanrinmaru" as an interprete.

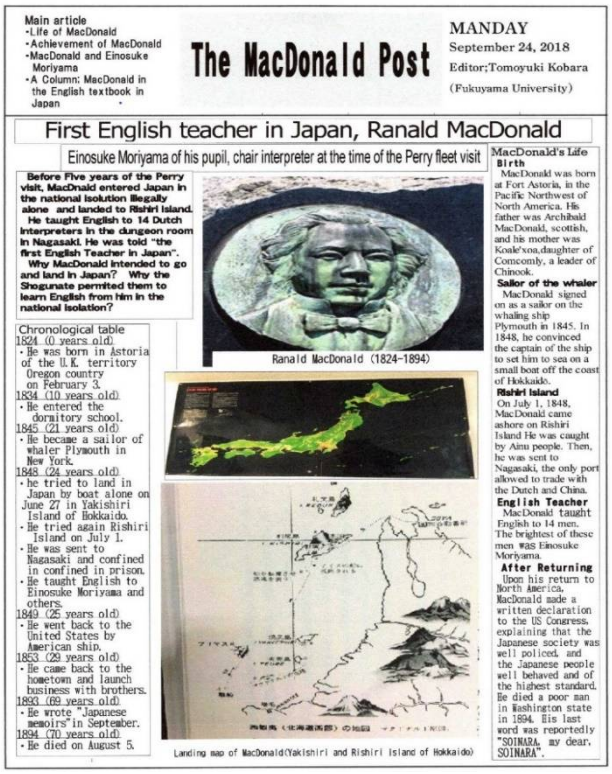
1869 (42 years old)
- He was professor of Kaisei school (existing Tokyo University)

1870 (43 years old)
- He visited Europe to inspect Franco-Prussian War.

1888 (71 years old)
- He died by cerebral hemorrhage.

別紙 4 “The MacDonald Post”

（表面）



Main article
- Life of MacDonald
- Achievement of MacDonald
- MacDonald and Einosuke Moriyama
- A Column: MacDonald in the English textbook in Japan

The MacDonald Post

MANDAY
September 24, 2018
Editor;Tomoyuki Kobara
(Fukuyama University)

First English teacher in Japan, Ranald MacDonald

Einosuke Moriyama of his pupil, chair interpreter at the time of the Perry fleet visit

Before Five years of the Perry visit, MacDnald entered Japan in the national isolution illegally alone and landed to Rishiri Island. He taught English to 14 Dutch interpreters in the dungeon room in Nagasaki. He was told "the first English Teacher in Japan".
Why MacDonald intended to go and land in Japan? Why the Shogunate permited them to learn English from him in the national isolation?

Ranald MacDonald (1824-1894)

Landing map of MacDonald(Yakishiri and Rishiri Island of Hokkaido)

Chronological table
1824 (0 years old)
- He was born in Astoria of the U.K. territory Oregon country on February 3.

1834 (10 years old)
- He entered the dormitory school.

1845 (21 years old)
- He became a sailor of whaler Plymouth in New York.

1848 (24 years old)
- he tried to land in Japan by boat alone on June 27 in Yakishiri Island of Hokkaido.
- He tried again Rishiri Island on July 1.
- He was sent to Nagasaki and confined in confined in prison.
- He taught English to Einosuke Moriyama and others.

1849 (25 years old)
- He went back to the United States by American ship.

1853 (29 years old)
- He came back to the hometown and launch business with brothers.

1893 (69 years old)
- He wrote "Japanese memoirs" in Septeader.

1894 (70 years old)
- He died on August 5.

MacDonald's Life

Birth
MacDonald was born at Fort Astoria, in the Pacific Northwest of North America. His father was Archibald MacDonald, scottish, and his mother was Koale'xoa,daughter of Comcomly, a leader of Chinook.

Sailor of the whaler
MacDonald signed on as a sailor on the whaling ship Plymouth in 1845. In 1848, he convinced the captain of the ship to set him to sea on a small boat off the coast of Hokkaido.

Rishiri Island
On July 1, 1848, MacDonald came ashore on Rishiri Island He was caught by Ainu people. Then, he was sent to Nagasaki, the only port allowed to trade with the Dutch and China.

English Teacher
MacDonald taught English to 14 men. The brightest of these men was Einosuke Moriyama.

After Returning
Upon his return to North America, MacDonald made a written declaration to the US Congress, explaining that the Japanese society was well policed, and the Japanese people well behaved and of the highest standard. He died a poor man in Washington state in 1894. His last word was reportedly "SOINARA, my dear, SOINARA".

（裏面）

MacDonald Post MANDAY 24th September, 2018

Ranald MacDonald
The honoring monument of MacDonald and Moriyama in Nagasa
Einosuke Moriyama

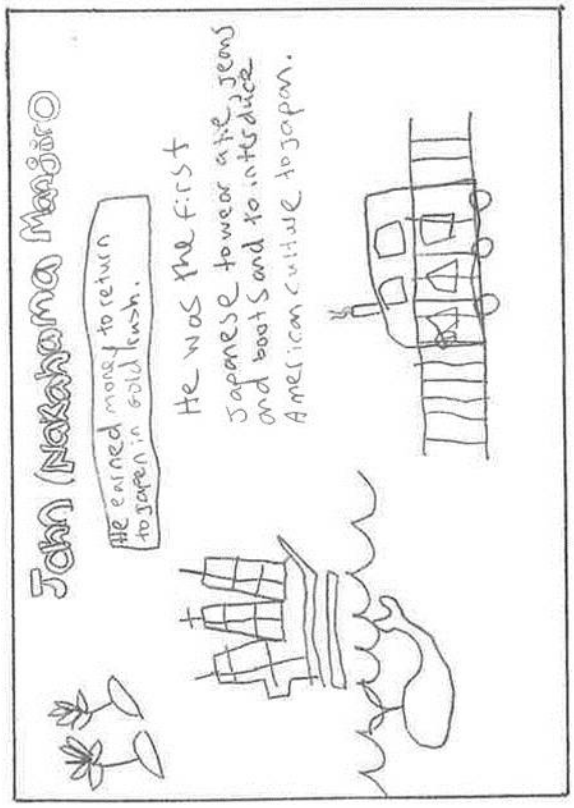
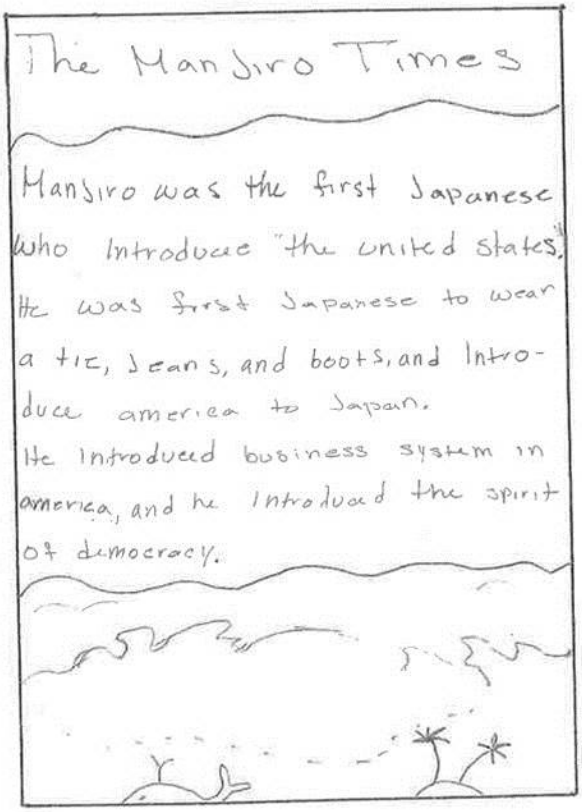
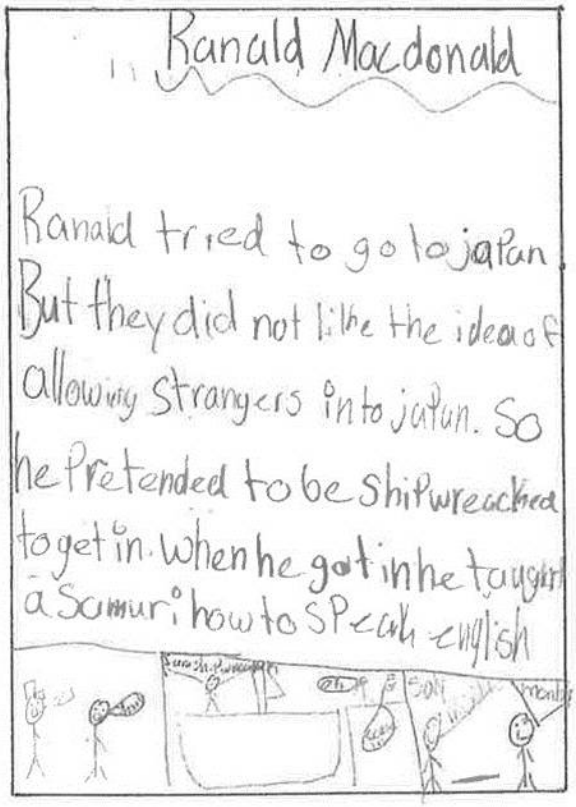
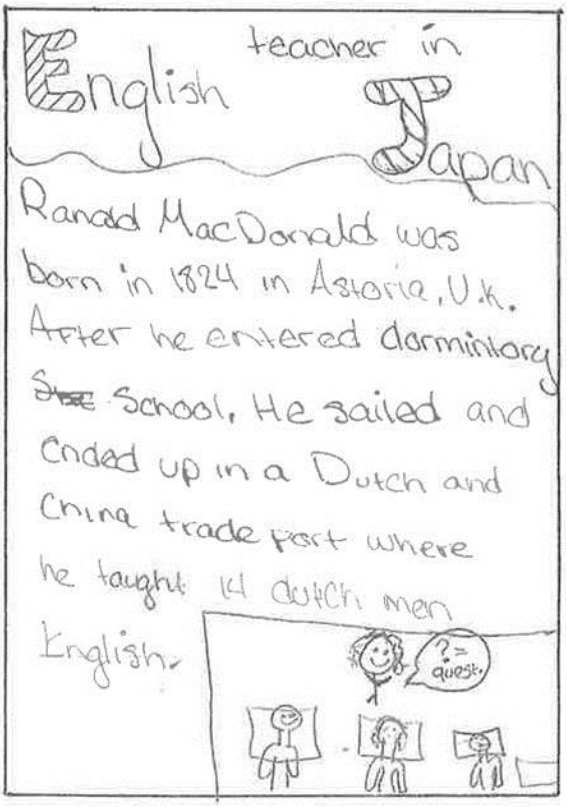
MacDonald and Einosuke Moriyama
Along with MacDonald's honor monument of Kaminishiyama-machi, Nagasaki-City, there are the monuments of Ranald MacDonald and Einosuke Moriyama.
The MacDonald was 1994, and Moriyama is 2014.
Einosuke Moriyama was not only chair-interpreter at the time of the Perry visit, but also was the person who made an outstanding performance in the negotiations with foreign countries, the making of the diplomatic note in the late Tokugawa period including the Japan -U.S. trade agreement.
MacDonald evaluated Moriyama that his English improved dramatially.

Rishiri Mount Fuji
Monument (Rishiri Island)
The landing point (Rishiri Island)
Landing monument (Yakishiri Island)
Grave in State of Washington
Monument in the birth place
Japanese-English vocabulary memo by MacDonald
Honoring monument in Nagasaki

Column: "MacDonald in the English textbook in Japan"

Ranald MacDonald taught English to 14 Dutch interpreters. He was the first English teacher in Japan. One of his students, Einosuke Moriyama was the most ecellent student of his. When Perry, American Commodore came to Japan to demand the opening of itself to the world, one of his students, Einosuke Moriyama acted as interpreter in 1853.
Japanese goverment handed over MacDonald to the American warship that entered Nagasaki (southan part of Japan) 1849. His captive life in Japan for 10 manths ended. He wrote the book "Japan memoirs", after he returned to America. He said in his book "Japanese society was a constiutional state and the cultural level of the people was high." These informations in his book affected American policy toward Japan. His work was highly regarded now.
MacDonald died at 70 years old in 1894. His last word was "SOINARA my dear SOINARA" (SAYONARA means good-by in Japanese).
MacDonald's story to teach English to Japanese, Einosuke for the first time, is in the English textbook for the junior high school of Japan. He was the first English teacher. In addition, "the Meeting of the MacDonalld's Friend" is made, and the activity still continues.

MacDonald in the junior high school English textbook

別紙５　はがき新聞例（広島大学附属三原中学校７年生作成）

別紙６　はがき新聞例（C.M.Eppes Middle School ７年生作成）